

最後に、フレーベルは、自分が構想した幼児教育施設に「キンダーガルテン」（子どもの園）という名称を与えた。このことについて、倉橋はつぎのように述べている。

「園とはこれ、実に、自ら生育すべき種子が、周到なる園丁に保護せられ、育成せられて、その発達を全うするところである。そこには、野生でない自然がある。温室でない培養がある。放任でない自由がある。抑圧でない管理があり、強要でない期待がある。のみか、園の一字に、何という心持ちのあたたかさ、や

わらかさと、うるおいとの感ぜられることであろう。

フレーベルが幼児の教育について抱懐する理性と感情とが、美しくも盛り込まれているのみでなく、正しくて素直なる感触を以て、これを他に受け取らしめる」

（『フレーベル』）

ここに、幼稚園のたましいが、あり方が、余りなく示されている。幼稚園は、何よりも「子どもたちの園」なのである。

（お茶の水女子大学）

## 変わること 変らぬこと

M  
・  
H

新しい年の訪れである。しかし、暦の変化とともに「新春を寿ぐ」という、あの伝統的な感覚が、果たして私どもの中にいきいきと脈打っているのだろうか。新春を実感するのは、もしかしたら、「正月番組」を録画し終えたテレビ局や、歳末セールで商品を売りつくしたデパートだけなのではと、皮肉な視線を投げてみたくもなる。

伝統的社会が作り出した「ハレ」と「ケ」のリズムが、私どもの日常とは無縁と化し、そのことのもたらした生活の平板化が憂えられて、既に久しい歳月が流れている。幼い人たちにとっても、「お正月」は、単なる休日以上に特別な意味を持たず、街中の新春化粧も、クリスマスや七夕の、さらには時を選ばずくり返される「〇〇まつり」の、飾り付けとしてしか受けとめられない。昨今、この雑誌も、ことごとくしく「新春の企画」を表面化する必要などないのではないか。「表紙」が新しくなった。「巻・号」を改めた。その程度で、あるいは充分というこ

とも知れない。

しかし、保育現場では、やはり「お正月らしさ」を演出して、それなりの工夫が試みられることだろう。そして、地域社会でも、子ども向けの新春行事が企画される。たとえば、「たこ上げ大会」、「年賀状コンテスト」など……。

懐しく、温かった過去への愛惜と、伝統の喪失を憂える一種の共通感覚が、こうしたイベントの推進力となる。これらイベントは、しばしば「子どものために」とスローガンを掲げてはいるが、実は、公的にも私的にも、「大人たちのため」だったりするのではないか。「伝統」を愛あひなしむのも、それを価値として重視するのも、いずれも幼い人たちでないことだけは確かだからである。

私たちの時代は、余りにも急速に「古いもの」を破壊し尽くしてきた。そして、いま、私たちの予測を越えた速さで、新しく未知の社会が近づいてきつつ

ある。いわゆる「情報化」「ハイ・テク」の時代：  
…。通信網の発達やコンピュータ機器の普及は、  
抗ちがいようもなく私たちの日常を変貌させている。そ  
して、この変貌は、とどまることを知らない。私た  
ちには、行手が見えなくなりかけている。何が待ち  
受けているか不明の明日……。

「伝統回復」と、その「継承」を叫ぶ声が、あち  
こちで上り始めたのは、恐らくこのことと無縁では  
ない。未来が見通せぬとき、私たちは、無意識のう  
ちに「過去」をふり返る。すがりつくものにしか見  
出せないということだろうか。いま、歴史研究が活  
況を呈し、歴史への大衆的人気が盛り上っているの  
も、その一つの現われと言えよう。

しかし、若い人たちは、「現在」を生きつつあ  
る。私たち大人世代にとっては、困惑に満ちた現代  
であろうとも、彼らにとっては自明の現在に他なら  
ないし、私たちにとっては、不安と混迷の明日も、

彼らにとっては淡淡たんだんと引き受けるしかない時の流れ  
である。

急テンポに進み続ける生活の変化に、世界的規模  
の一大決意の下、ストップをかける……。こんなこ  
とが、果たして可能だろうか。あるいは、日常レベル  
での伝統と現在のバランスを、どのていどに保ち、  
その妥当性を検証すべく、どんな目盛りを作り出し  
ていったらよいか。私たちが現在を憂えたり、過  
去の復権や継承を企てたりするときは、当然なが  
ら、こうした思索が前提となっている筈である。し  
かし、多くの場合、私たちは、この前提をふんでい  
ない。現象としての変貌に当惑し、「ついでにいけな  
い」という生活実感が無意識的な前提となって、慌  
しく「手がかり」となりそうなものが探し出され  
る。「過去」という既知の世界の中から……。 「伝統  
回復」の企てが、こうした脆弱で便宜的な姿勢に支  
えられていなければ幸いである。

保育現場で、幼い人たちの素材で自然な「生活」と、自由な「遊び」を重視しようという声が、以前にまして盛んになり始めている。このことは、新しい教育要領の眼目でもあるだろう。そして、そのこと自体は、もちろん、当然すぎるほど当然な、幼児保育の不朽の真理に他なるまい。幼い人たちの「生活」と「遊び」を無視した保育など、考え得べくもないことだからである。そのゆえに、また、「生活」と「遊び」の重視は、幼児保育界に脈脈と流れ続ける、不滅の伝統でもあるだろう。

幼い人たちに、自然な「生活」と自由な「遊び」を保証する新要領の方向性も、それを率先して実践しようとしている現場の動向も、その「正統性」を讃えられてしかるべきであろうし、その「健かさ」は十分に評価されねばなるまい。しかし、この流れが、先ほどから考えてきた「伝統回帰」の動きと、どこやらでつながるのかも知れないと気付くなら、

私たちは、この流れを手放して讚美し、喜んで身を任せてだけはいられないのではないか。

幼児保育の不滅の真理、変わることはない流れとばかり、その自明性に安住することなく、この激変の「現代」を自分たちの「現在」として生きる幼い人たちにとって、保育の真髓が変わらないのは何故か、あるいは、変わらなくてよいのは何故かと、問い直してみる必要があるであろう。「健全さ」という名の鈍感さ」は、私たち保育界に、しばしが見出される特性である。このことは、一面から言えば、保育という原初的な営みを安定させるべく、重要な特性でもあるのだが、また、弱点の一つに他ならないことは、否み得べくもないからである。

(お茶の水女子大学)